

---

# とんがり帽子の女の子

アボンリー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とんがり帽子の女の子

### 【Nコード】

N0908F

### 【作者名】

アボンリー

### 【あらすじ】

おばあちゃんが亡くなって独りぼっちになってしまったアイナの前に、不思議な子供たちが現れます。その子供たちといっしょに虹のトンネルをくぐると、そこには見たこともない素敵な世界がありました。

## 第1話 ようこそフェアリーアイランドへ 前編

「おばあちゃん、お花を持ってきたよ。ほら見て、きれいでしょ。私が一生懸命育てたのよ」

それはむかしむかしのお話でした。ここは小さな国の小さな森の中。女の子は、お墓の前で誰かに向かって話しかけていました。

その人は女の子のおばあさんでした。女の子の両親は彼女が小さいときに泣くなってしまい、おばあさんといっしょに住んでいたのですが、そのおばあさんも女の子の両親と同じ病気で亡くなったのでした。

「じゃあ、おばあちゃん、また明日も来るからね」

そう言って女の子が立ち上がって帰ろうとしたその時、誰かに見られているような変な感じがしました。

しかし、辺りを見回しても姿は見えません。でも、確かに彼女は何かの気配を感じていたのです。

「だーれ？だれかいるの？」

女の子はそう叫んでみましたが、何の反応もありません。

「やっぱり私の勘違いだったのかしら・・・」

そう思ったその時、目の前にうつすらと何かが見えました。

それは蝶のよでしたが、何か違います。

目をこすってよく見ると、小さな人の形をしているようにも見えま  
す。

それは、とがった耳と小さな可愛らしい羽根、オレンジ色の花び  
らのようなドレスを着ていました。

そう、それは妖精だったのです。

妖精は、まさか自分の姿が見えているとは気づかないで、女の子  
の様子を観察するように眺めていました。

女の子はドキドキしながらも、妖精に会えるなんてこんなチャン  
スは二度とないと思い、勇気を出して話しかけました。

「こんにちは。あなた妖精でしょ？」

妖精は突然の女の子の言葉に、心臓が止まるくらい驚きました。

純粋な人にしか姿が見えないからです。

「あら、驚いた！あなた私の姿が見えるのね。ちょうどよかったわ。  
私たちは自分の姿を見ることのできる心の綺麗な子を探していたの。  
もしよければ私たちと友達になってほしいのよ。ちょっと待ってね。  
あとの二人を呼ぶから。」

妖精は後ろを向いてどこかに向かって大声で叫びました。

「二人とも！もう出て来てもいいわよ。」

すると、少し離れた大きな木の後ろから、二人の子供が現れました。

二人は、どこか緊張しながら女の子のそばにゆっくりと歩いてきました。

「紹介するわ。私は妖精のルーシー、そしてこの子は姉のはフェリシア、もう1人は弟のリックスよ。二人は姉弟の中小人とこじんなの。中小人っていうのは妖精よりは大きいけど人間よりは小さいって言う意味なの。」

確かに二人の子供は、小人と言う感じはしませんでした。身長も人間の子と同じくらいのように見えます。しかし、はっきり違う部分もありました。きれいな赤毛と妖精のようにとがった耳をしていました。

「こんにちは。私はアイナ・クラークっていうの。よろしくね」

初めて会ったばかりのアイナたちはもうすっかりと打ち解けていました。

「ねえ、アイナ。私たちの世界に遊びに来ない？私たちは人間の子を私たちの世界に招待するために来たの。」

ルーシーにそう言われたアイナは、嬉しそうに答えました。

「ええ、いいわ。ぜひ連れて行ってちょうだい。ちょっと怖いけど

すごく面白そうだわ。」

「そう言ってくれてとても嬉しいわ。ほかの人たちも人間が来ることをとても楽しみにしているのよ。さあ、行きましょ。」

アイナは、ドキドキしながらルーシーたちについて行きました。

するとそこには、虹の輪のようなものがぼんやりと浮かんでいるのでした。

「なーに？これ・・・こんなの初めてみたわ。とってもきれい！」

アイナは嬉しそうに言いました。

「これは虹のトンネルよ。私たちの世界とあなたたちの世界がこのトンネルでつながっているの。そしてこのトンネルは100年に1回、3日間しかつながらない不思議なトンネルなの。」

ルーシーがそう説明してくれました。

「ねえ、詳しい話は向こうに行つてからでもいいんじゃないの。そろそろ行きましょよ。」

そう言つてフェリシアはトンネルの中に消えていきました。

その後を、ルーシーとリックスが続けました。

アイナは一瞬ためらいましたが、勇気を出してトンネルの中に足を踏み入れました。トンネルの中はフワフワとしていて、まるで雲

の中を歩いているようでした。

アイナがトンネルを抜けると、ルーシーたち3人は声をそろえて言いました。

「ようこそフェアリーアイランドへー！」

そこには、色とりどりの美しい花が咲き誇っています。その花畑は、まるでどこまでも続いているかのようでした。花の甘い香りに誘われて、見たこともないようなきれいな羽をもった蝶や、妖精たちが集まっています。

「まあ、すてき！こんなのはじめて見たわ。なんだかここにいるといやなことを全部忘れさせてくれそうだわ」

アイナは嬉しそうに言いました。

「ね？来てよかったでしょう。別に自慢するつもりはないけど、ここよりも綺麗な場所はどこにもないと思うわ」

「よく言っよ。すっかり自慢してるくせに」

フェリシアはジロリとリックスをにらむと、また話を続けました。

「ねえ、ちょっとこの花をさわってごらんさいよ」

そう言われてアイナは、このラッパのような形をした花をちょん

とさわってみました。すると花が、ラッパのような音を出したのです

「どう、おもしろいでしょ？これはラッパ草って言ってさわるとラッパのような音をだすのよ」

「ほんと！とっても面白いわ。もう一回やってみよう」と

そう言ってアイナは、トランペット草やハーブ草、そしてフルート草などを手当たりしだいにさわりました。それを見てフェリシアたちも同じように色んな花をさわりました。すると、辺りからいろんな音が流れて、まるでオーケストラのようでした。そしてアイナは、指揮者のような気分を味わっていました。すると、その音に反応してほかの花たちが動き出しました。この花は、音に反応して動き出すのです。

「すてき！まるで花たちがダンスを踊っているみたい！」

その周りでは、妖精たちも一緒にくるくると踊っていました。

花や妖精たちとダンスを楽しんだ後、リックスがニヤニヤしながら言いました。

「ねえ、アイナ、今度はこっちの花をさわってみなよ。面白いからさ」

アイナは、今度はどんな素敵なことが起こるのだろうとわくわくしながら、その花をさわってみました。すると、ものすごい臭いがアイナの花を襲いました。

それを見てリックスは、してやったりと大笑いしていました。

「もう！リックスったらひどいじゃない。鼻がこわれちゃうかと思っただわ。ルーシーたちも黙ってないで教えてくれてもいいじゃない。意地悪ね」

するとルーシーが笑いながら言いました。

「ごめんごめん、悪かったわ。その花は動物たちに食べられないようにくさい臭いを出して身を守っているのよ。お詫びにもっと面白い花を見せてあげたいんだけど・・・その花は雨が降った後じゃないと見られないのよ。今日のこの空の様子ではちょっと無理かもしれないわね・・・」

「降らない雨の話をしたってしょうがないよ。今度はほかの場所に行こうよ」

リックスが言いました。

「ええ、そうね。じゃあ、森に行きましょうか。あそこにも見せたいものがたくさんあるから」

みんなフェリシアの意見に賛成して、森に向かいました。

その森は、アイナが知っている森とはまったく違いました。木の色がオレンジのような色をしていて、葉の色は青い色をしています。さらに、その葉の形も見たことのないものでした。

「不思議だわ。青い森なんて初めてよ。何だかまるで海の中にいる

みたいだわ。ほら、見て。あそこに飛んでいる鳥達が魚で、その下に生えてある変わった形のキノコはサンゴよ」

「くだらない空想がすきなね。どう見たって森はただの森よ。海の中には見えないわ」

「フェリシアったら夢がないのね」

「フェリシアはどちらかという現実主義なのよ」

ルーシーが笑いながら言いました。

「現実主義で悪かったわね！」

フェリシアが少しムツとして言いました。

「別に悪いとは言っていないわよ。あら、アイナどうしたの？」

アイナは、じっと何かを見つめていました。そこには、星型の甲羅を背負ったカメが、ウサギのようにピョンピョンと飛び跳ねていました。

「ああ、あれね。あれは星ガメっていうのよ。ちょっとアイナ!どこ行くのよ!」

「星ガメに聞いて!」

アイナはルーシーの説明の途中で、星ガメを追いかけて走り出したのです。

「もう！何を考えてるのよ、あの子は・・・初めて来たばかりの世界で右も左も知らないくせに、一人でどこかに走っていくなんて・・・迷子になったらどうするつもりなのかしら。ねえルーシー、あの子を選んだのは間違いだったのかしら。」

「フェリシアだってちゃんと賛成したはずよ。今さらそんなことを言ってもしょうがないじゃない。あの子はきつと初めて見るものばかりでとても興奮しているのよ。だから夢中になって星ガメを追いかけていつちゃったんじゃないかしら。私があの子を連れ戻すからあなたたちはここで待っててちょうだい。すぐにもどってくるから」

そう言ってルーシーは、アイナを追いかけて飛んでいきました。

「あれー？どこに行ったのかしら・・・確かこの辺りに逃げたと思っただのに・・・残念だわ。せつかく仲良くなるうと思ってたのに・・・」

アイナはしばらくして冷静になりふと辺りを見渡すと、そこにはルーシーたちの姿は見えず、ここでようやく自分が迷子になってしまったことに気づいたのでした。

アイナは、すぐにルーシーたちが探しに来てくれるだろうと思いき、そんなに心配はしていませんでしたが、いつまでたっても誰もこないで少し心配になってきました。

「もしこのままみんなに会えなかったらどうしよう・・・ルーシー

「フェリシアー！リックスー！」

しかしアイナの必死の叫び声も、ルーシーたちの耳には届きませんでした。しかたないのでアイナは、まったく知らないこの森の中を、みんなを探してとぼとぼと歩き出しました。

アイナの周りには、おもしろい動物や植物がたくさん見られましたが、今のアイナにはそれを楽しむ余裕はありませんでした。しばらく歩いてみると、目の前に小さな家を見つけました。

「こんな森の中に家があるなんて・・・一体、誰が住んでるのかしら。何だか物語りにでてくる魔女の家みたいだわ。ちょっと怖いけど勇気を出してこの家の人に助けてもらおうしかなさそうね」

アイナが家をノックすると、ギイーっというきしんだ音とともにドアがゆっくりと開きました。そして家の中から、本物の魔女かと思間違えるような怪しいおばあさんが出て来て、アイナの上から下までをじろりと見てこう言いました。

「ははあ、なるほどね。あの子たちが人間の子を連れて来ると言っていたけど、それはあんたのことだね。そしてあんたはこの森で迷子になってしまった。そうだね？アイナ・クラーク」

アイナは、このおばあさんが全てを知っているのととても不気味に感じました。そしてこの人は本物の魔女ではないかと強く思いました。

「そんなところに立ってないで部屋に入ったらどうだい」

「わたしをどうする気なの？」

「私が怖いのかい？」

「だっておばあさん、魔女なんですよ？」

「あはははは。私はただのばあさんだよ。それにあんたを食べるわけではないんだからさ。安心してお入り」

アイナは、恐る恐る部屋の中に入りました。部屋の中には、たくさんのおばあさんの本や薬の空き瓶、そして何かの動物の骨などがたくさんありました。そして、何か不思議な臭いもします。しかしアイナは、不思議と不気味さを感じませんでした。それどころか、どこか懐かしさを感じました。このおばあさんに対する恐怖心もそれほど感じなくなっていました。

「少し変な臭いがするかもしれないけど我慢しておくれ。頼まれた薬をナベで煮ている最中だからね」

「あら、そんなの平気よ。だって死んだ私のおばあちゃんもよくこうして薬を作っていたのよ。よかつたら何かお手伝いしましょうか？」

「そんなことは気にしなくてもいいんだよ。せっかくのお客さんにそんなことをさせるわけにはいかないからね。あんたは座ってればいいのさ。そういえばまだ名前を言ってなかったね。私はグリムだよ。みんなからはグリムばあさんと呼ばれているのさ」

「ねえ、おばあちゃん。どうして会ったこともない私のことを詳し

「知っていたの？」

「ああ、そのことかい？答えは簡単だよ。私はたくさん妖精たちと知り合いなのさ。その妖精たちが頼みもしないのにいるんなことを教えてくれるんだよ。だから私はここにいなから村や森で何があったかを知ることが出来るのさ。ほら、今も1人ここにいますよ」

グリムの後ろから、小さな男の子が出てきました。

「妖精たちは好奇心が強い反面、警戒心も強いのだ。だからあんたが来たので警戒して隠れていたんだよ」

グリムはその妖精にルーシーたちにアイナがここにいることを知らせてきて欲しいと頼みました。すると妖精は、窓から飛んでいきました。

「さあ、ルーシーたちのことはあの子にまかせてゆっくり休むといよ。歩き回ってつかれただろうからね」

アイナは甘い花の蜜で作ったジュースを飲んで、ほっと一息つきました。そして、人間の世界のことや、自分のおばあさんのことなどをいろいろ話しました。





## 第1話 ようこそフェアリーアイランドへ 後編

それからしばらくして、フェリシアとリックスがやって来ました。それを見てアイナはのんきな顔で言いました。

「ねえ、フェリシアたちもこっちに来ていつしよに飲まない？とつてもおいしいわよ」

「妖精に教えてもらってここに来たけど・・・あなたここで何やってるのよ！私たちがどれだけ心配したかわかってるの？ルーシーはまだあなたのことを真剣に探してるのよ」

「それは本当に悪かったわ。でもしょうがないのよ。私だっている」と大変だったのよ」

「それはアイナが勝手に走り出したのが悪いんでしょ？」

「こうしてちゃんと出会えたんだからもういいじゃないか。もうすぐルーシーもここに来るだろうからさ、あんだ達たちもゆっくり休みなよ。薬草入りのおいしいクッキーもあるよ」

グリムは、アイナをかばうように言いました。

「クッキーだって？」

リックスは嬉しそうにクッキーを食べました。

アイナたちはおしゃべりをしながらルーシーが来るのを待っていました。すると、窓の隙間からルーシーが部屋に入ってきました。

「もう！アイナのせいで大変よ。おまけに雨にも降られてもう最悪」

「雨だつて？おや、本当だねえ。いつの間にか雨が降っていたんだね。しばらく雨宿りしていくといいよ。どうせ通り雨だからすぐに止むだろうからさ」

グリムは、窓から空を見ながら言いました。

アイナも窓から外を眺めてみました。すると、外にはうつすらとピンク色をした雨がしとしと降っていました。

「この世界ではピンク色の雨が降るのね。とても驚いたわ」

「あら、ピンク色だけではないのよ。全部で7種類あるの。赤色、黄色、オレンジ色、紫色、茶色、緑色、ピンク色の七色よ。しかもただ色が違うだけではなくてそれぞれいろんな味がするのよ。赤色はさくらんぼ味、黄色はレモン味、オレンジ色はみかん味、紫色はグレープ味、茶色はチョコレート味、緑色はメロン味、ピンク色はイチゴ味よ」

フェリシアの説明を聞くとアイナは、どうしても自分で確認したくなって外に出ました。そして、両手をのばしてピンク色の雨を受け止めると、ペロリとなめてみました。

「おいしい！本当にいちごの味がするのね。ほかの雨の味見もして

みたいわ」

「感激するのもいいけど、早く部屋に入らないと雨にぬれて風邪を引くわよ」

アイナは、フェリシアにそう言われていそいで部屋に入りました。そして雨が止むまで部屋の中でおしゃべりを楽しんでいました。

雨はすぐに止みました。どうやらグリムの言っつように通り雨だったようです。

「雨も止んだみたいだし、外に遊びに行きましょうよ」

「ねえ、アイナ。花畑に行くと面白いものが見られるかもしれないわよ」

ルーシーがそう言いました。

「本当？それはぜひみて見たいわ」

そう言つとアイナはうれしそうに外に飛び出して行きました。

「ちょっと！せめておばあさんにお礼くらいしなさいよ。散々お菓子を食べたり飲んだりしたくせに、さっさと出て行くんだから」

フェリシアは大声で叫びましたが、アイナの耳には届いていないようでした。

「私のことならいいんだよ。そんなくだらなないことなんて気にしちゃいないよ。それよりも早くあの子を追いかけたほうがいいんじゃないかい？ そうしないとまた迷子になってしまうよ」

「それもそうね。あの子、何も知らないくせにおかまいなしにどんだん前に進んで行くんですもの。ほら、リックス行くよ。ちよつと！ あんたいつまで食べてるのよ」

フェリシアは、リックスの耳を引っ張って外に出て行きました。その後ルーシーも出て行きました。

みんなが出て行って静かになった部屋でグリムがつぶやきました。

「やれやれ・・・やつと静かになったね。それにしてもあのアイナつて子。面白い子だね。いつの間にかみんなあの子のペースに巻き込まれてしまう。不思議な子だよ、まったく。さすがのルーシーやフェリシアも、あの子には手を焼くだろうね」

その頃アイナは、森の中を夢中になって走っていました。後ろからフェリシアの叫び声がします。

「ちよつとアイナ待ちなさい！ 待ちなさいってば！ 一体どこまで振り回せば気がすむのよ」

しかしアイナにはその声は聞こえていないようでした。ただまっすぐ走っていました。

森をぬけて花畑にたどり着くと、アイナはその光景に驚きました。

なんと花がハートや星の形をしたシャボン玉を飛ばしているではありませんか。

アイナが日の光を浴びて光り輝くシャボン玉に見とれてうつとりしていると、ようやく追いついてきたルーシーが説明してくれました。

「どう？すごいでしょう。アイナはとても運がよかったわ。これが見られるなんてとてもめずらしいのよ。これはシャボン花というの。この花は雨が降るとその水を吸収して特殊な液体を混ぜて、種をつむようにシャボン玉を作るの。そして風の力を借りて遠くに種が入ったシャボン玉を飛ばすのよ。しかもこの花は気まぐれで雨が降ったからといってかならずシャボン玉を飛ばすとはかぎらないのよ。本当にラッキーだわ」

その頃ようやくフェリシアとリックスもやって来ました。フェリシアは、一言アイナに文句を言おうとしましたが、きれいなシャボン玉を見るとそんなことはどうでもいいと思いました。この世界に住んでいるフェリシアにとってもこの光景はとてもめずらしいことだったのです。

「また失敗した。今度こそ！」

リックスは、花畑に來ると同時に必死になってシャボン玉をつかまえようとしていました。

「ねえ、フェリシア。リックスは何をしてるの？」

不思議そうにアイナが言いました。

「ああ、あれね。もしシャボン玉を壊さないように上手につかまえることができたらとてもいいことがあるっていう伝説があるの。リックスはまだ一度もつかまえたことがないものだから必死になってるのよ。私は一度だけつかまえたことがあるけどね」

「おもしろそうな話ね。私もやってみるわ」

そう言うとアイナは、フワフワと風に舞っているシャボン玉を追いかけてました。しかし、シャボン玉はそう簡単にはつかまらないようです。

その様子を見てルーシーが笑いながら言いました。

「どう？思ったよりも難しいでしょう？」

「ええ、そうね。リックスの大変さがよくわかったわ。でも私は諦めないわよ」

最初は笑いながら見ていたフェリシアやルーシーも、アイナが必死にシャボン玉を追いかけている姿を見て、いつの間にか応援していました。疲れ果てて座り込んでいたリックスも、手に汗握って応援しています。

みんなの応援に勇気もらったアイナは、よりいっそうがんばりました。そして、ついにシャボン玉をつかまえたのです。それは、ハートの形のシャボン玉でした。

「見て！つかまえたわよ。ほら！」

「まだよ。そのままシャボン玉が壊れないようにして3秒数えるの。3秒間壊れなければ成功よ」

ルーシーにそう言われてアイナは、手の中にあるシャボン玉を壊さないようにゆっくりと3秒数えました。

「いち、にーい、さーん」

「やったわね。おめでとう！」

ルーシーが飛んできて言いました。その後ろからフェリシアとリックスも笑顔でアイナのもとに走ってきました。

「すごいじゃない。初めてでいきなり成功するなんて・・・私なんか3回目でやっと成功したのよ」

「ありがとう、フェリシア。みんなの応援のおかげだわ」

リックスは少し悔しそうでしたが、素直に認めて言いました。

「すごかったよ。おめでとう」

「ありがとう」

アイナはニコリと笑いました。

「さあ、踊りましょう」

近くで見ていたたくさんの妖精たちにさそわれ、アイナたちはみ

んなで輪になってくるくと踊りました。

アイナたちが楽しそうに踊っていると、突然何者かが目の前に姿を現しました。

それは妖精の女王でした。女王はほかの妖精たちとはまったく違い、人間の女の人と同じくらいの身長で、とても美しい姿をしていました。そして頭には黄金のティアラが光り輝き、その眼差しはすべてをつつみこんでくれるような優しさと女王としての威厳がありました。

女王の姿を見て、さっきまでいっしょに踊っていた妖精たちはサツといなくなりました。

「ルーシー？人間の子を連れてきたら、まず最初に私に報告する約束ではなかったの？」

「ごめんなさい。女王様・・・紹介します。この子が人間の女の子のアイナです」

ルーシーは小さな声で言いました。

「初めまして。私が女王のメアリーナです。フェアリーアイランドへよく来てくれました。少しの間ですが、みんなと楽しんでくださいね」

「はい。ありがとうございます」

挨拶が終わると女王は、またどこかに消えていきました。

「あら、いつの間にかすっかり日が暮れてるわ。そろそろ帰らなくちゃ。ねえ、アイナ。私の家に泊まりにこない？お父さんもお母さんもあなたに会うのをとても楽しみにしているのよ」

「ありがとう、フェリシア。でもやめとくわ。ここは夢のように素敵な世界だけど、やっぱり自分の家が1番落ち着くの」

「それもそうね。じゃあ、また明日会いましょ」

「みんなさよなら。また明日遊びましょ」

アイナは元気に手を振って虹のトンネルの中に消えていきました。

アイナに手を振りながらフェリシアは、少し不安そうに言いました。

「ねえ、ルーシー。もしもよ。もし突然トンネルが消えちゃったらどうしよう。もう一生、あの子には会えなくなるのよね」

「大丈夫よ。それは絶対ないわ。必ず3日間はずながっているはずだから安心しなさいよ。その後のことは、今は考えるのはやめましょ。今はたくさん楽しい思い出を作りましょよ。でもおかしいわね。だってフェリシアったらあの子の文句ばかり言ってたのに……」

「私だって最初は本当にこの子を連れてきて良かったのかしらって思ったわ。でも……今日初めて会ったばかりなのに、もし会えなくなったらどうしようと思うと何だか変な気持ちになるの。どうしてかわからないけど……」

「そんなことはどうでもいいじゃんか。ねえ、早く帰ろうよ。今日はいっぱい走ったから、いっぱいお腹がすいちゃったんだよ」

「あんたは食べることに頭がないわけ？」

「ねえ、今日の夕食は何かな」

「私知ってるわけではないでしょ」

そう言いながら二人は帰っていきました。

「やれやれ・・・」

そう言ってルーシーも帰りました。

## 第2話 最後の1日 前編

「アイナ起きて。もう朝よ。いつまで寝てるのよ。今日は村に行く約束でしょ。早く準備してちょうだい」

ルーシーは、アイナがいつまで待ってもやって来ないので家まで迎えに来たのでした。

アイナはまだ半分寝ぼけた顔で着替えと朝食を済ませると、虹のトンネルを通ってフェアリーアイランドへ行きました。

トンネルを出るとそこには綺麗な花畑があり、その花畑を森とは反対側に進むと、小さな小川があり、小さな橋がかかっています。その橋を渡ると、そこに小さな村がありました。村の入り口には何やらたくさんの村人の姿が見えます。

その村人たちを見てアイナは驚きました。あきらかに大人だと思われるヒゲを生やした人が、隣にいるフェリシアより少し背が高いくらいの身長しかありません。どう見ても140cmくらいしか見えません。さらに良く見ると、村人はみんなとんがり帽子をかぶっていました。それは、村人たちは背が低いことを気にしているので、少しでも背を高く見せるためにかぶっているのです。

アイナが村の入り口の前まで来ると、村人がいっせいに拍手をして、温かく迎えてくれました。

「何だか有名人になったみたい」

アイナは照れくさそうに笑いました。

「みんなそれだけあなたが来ることを楽しみにしていたのよ。ほら、あそこにいるのが長老さんよ。長老さんはもう140歳を超えてるけどとても元気なおじいさんなの。村を代表して挨拶をしたいんですって」

ルーシーが言いました。どうやら中小人の人たちは人間よりも長生きをするようです。

「やあ、良く来てくれたね。わしがこの村の長老、ブルーノ・フアングじゃ。我々はおまえさんを歓迎するよ」

「ありがとう、長老さん。私はアイナ・クラークよ。こんなに歓迎されてとっても嬉しいわ」

「ちょっと！ずいぶん来るのが遅かったじゃない。どうせ寝坊でもしてたんでしょ。まあいいわ。紹介するわね。私のお父さんとお母さんよ」

「やあ、初めまして。僕がフェリシアとリックスの父親のビリー・オズワイドだよ。」

「私は母親のアーニーよ。昨日は子供たちがお世話になったみたいね」

「ちょっと、おかあさん！お世話したのは私たちのほうよ」

「そうだよ。すごく大変だったんだからな」

フェリシアとリックスが不満そうに言いました。

「そんなことはどつちでもいいじゃない。さあ、アイナ。私たちの家に来てちょうだい。あなたを招待したいの」

「ええ、喜んで行くわ」

アイナは、いろんな人たちと挨拶を交わした後、フェリシアたちといっしょに家に向かいました。

家では、おいしい昼食をごちそうになり、楽しい時間を過ごしました。楽しい時間はあっという間に過ぎていき、気づいたらもう夕方になっていました。アイナは、また明日遊びに行く約束をして帰って行きました。

「アニーおばさん、こんにちは」

次の日アイナは、約束どおりフェリシアの家に遊びに行きました。また今日も寝坊してしまい、お昼を過ぎていたので、フェリシアに怒られるのかと思いましたが、そこにフェリシアはいませんでした。

「ねえ、アニーおばさん。フェリシアは？」

「フェリシアは2階で寝てるのよ。気分が悪いんですって」

「まあ、それは心配ね。ちょっと様子を見て来てもいいかしら」

「もちろんいいけど・・・誰も私の部屋に入らないでって言って部屋に入れてくれないのよ」

「どうしたのかしら・・・昨日まではあんなに元気だったのに・・・」

アイナは、心配してフェリシアの部屋に向かいました。部屋をノックして声をかけると、フェリシアが叫びました。

「私のことはほっといて！一人にしてちょうだい！」

それ以上、何を言ってもフェリシアは答えませんでした。

「どうだった？」

下の部屋で新聞を読んでいたビリーが心配そうに言いました。

「よくわからないけど、一人にしてくれて・・・それしか言わないの。どうしたのかしら。何かの病気かもしれないわね。ちょっとグリムおばあちゃんの家に行って薬をもらって来るわ」

アイナはそう言って走って出て行きました。

グリムの家に行くとアイナは、すぐにフェリシアのことを話しました。

「アイナって本当にドジねえ。病気って言ってもいろいろあるのよ。どんな病気なのかわからないと薬は作れないのよ」

グリムといっしょにいたルーシーが笑いながら言いました。

「じゃあ、いろんな薬をいっばいちょうだい。たくさん飲ませればどれかの薬が効いて病気が治るかもしれないわ」

「バカなこと言わないでよ。そんなに薬を飲んだら、よけい病気になるわよ」

「ルーシーの言う通りだよ。それに私はフェリシアは病気ではないと思うよ。何か別の理由があるんじゃないかね」

「別の理由？」

「ああ見えてあの子はけっこう繊細なところがあるからね。多分あんなと別れるのがつらいんじゃないかね」

アイナは、こうしてフェリシアたちに会えるのも今日が最後ということをすっかり忘れていました。この夢のように楽しい毎日が永遠に続くと思っていたからです。そして、それと同時にあることを真剣に考えていました。

「じゃあ、フェリシアはそれが悲しくて部屋に閉じこもっているっていうの？そんなの変よ。今日で最後だからそたくさん思い出をつくって後悔しないようにするべきなのに。いいわ。私がフェリシアを説得するわ」

「またルーシーの悪い病気が出たね。あんたのほうこそ薬を飲んだらどうだい。そのおせっかいが直る薬を作ってあげるよ。それに今はあまり刺激しないほうがいいと思うね。今何か言うのは逆効果だ

よ

「もう！おばあちゃんの意地悪。私は真面目に話してるのよ。それにのんびりしている時間なんてないんだからね。女王様の話だと虹のトンネルは今日の夕方には消えてしまうのよ。アイナだってフェリシアに会えないままのお別れなんていやでしょ？そんなことをしたらお互い、一生後悔することになると思うの。ねえ、アイナ聞いているの？」

「え？ええ、聞いてるわよ。ルーシーの言う通りよ」

この時グリムは、アイナが何かを言いたそうにしているのを感じました。そして、アイナが何を考えているのかもわかっていようでしたが、これは自分たちで解決しなければいけないことなので何も言いませんでした。

結局アイナたちは、フェリシアのことをどう説得するのかについて何も解決方法が見つからないままフェリシアの家に急ぎました。もうすぐお別れの時間が近づいていたからです。アイナはフェリシアの家に向かって歩いていて、めずらしく一言もしゃべりませんでした。あることとずっと悩んでいたからです。でもそれをルーシーに話すことは出来ませんでした。

ルーシーも何も言いませんでした。無言のままフェリシアの家に向かって飛んでいます。

家に入ると同時にルーシーは、真つ先にフェリシアの部屋に向かいました。そして、ドアの前で大声で叫びました。

「フェリシア！いいかげん出て来なさいよ。いつまでそうしてるつ

もり？アイナはもうすぐ帰っちゃうのよ。本当にこれでいいの？」  
のままじゃ一生後悔するわよ！」

「私のことはほっといてって言うてるでしょ！？」

フェリシアが叫びました。

「ねえ、フェリシア。話があるの。聞いてちょうだい」

今度はアイナが話しかけました。

「聞きたくない。何も聞きたくない！こんな悲しい思いをするなら  
最初から会わなきゃ良かった！」

「もう！フェリシアなんて知らない！勝手にすればいいわ。アイナ  
行きましょ。もうすぐ時間よ」

二人は仕方なく下の部屋に下りていきました。二人の顔を見てア  
ニーが言いました。

「困った子ね。でもしょうがないわ。さあ、アイナ。ここに座っ  
てちょうだい。最後のお別れ会をしましょ。」

テーブルにはおいしそうなごちそうがたくさん並んでいましたが、  
みんなほとんどごちそうを食べませんでした。みんな悲しくてごち  
そうどころではなかったのです。

「もう会えないと思うとやっぱり寂しいや。お姉ちゃん気持ちも  
ちよっとわかる気がするよ。まだ紹介したい面白い場所がたくさん  
あったのにな」

さすがの食いしん坊のリックスも、この日はかりはほとんど食べていませんでした。

「そんなこと言っても仕方ないでしょ。最初から3日間だけってことはわかってたことじゃない。その話はやめましょ。よけいに辛くなるだけだわ」

その後は、誰もしゃべりませんでした。無言のまま時間だけが過ぎていき、とうとうお別れの時間になりました。



## 第2話 最後の1日 後編

「さあ、アイナ。時間よ。行きましょ」

「私、フェリシアにお別れを言ってくるわ」

そう言うとアイナは、フェリシアのドアの前で話しかけました。

「ねえ、フェリシア。本当にお別れよ。最後にもう一度あなたの顔を見てちゃんとさよならを言いたかったわ。本当は私・・・」

「何も聞きたくないっていつてるでしょ！さっさと帰ればいいじゃない！早く帰りなさいよ！」

「さよなら」

アイナは悲しそうにそう言ってみんなのもとに行きました。

「おじさん、おばさん、本当にありがとう。料理とてもおいしかったわ」

「こちらこそ楽しい時間をありがとう。元気だね。体に気をつけるんだよ」

ビリーがやさしく言いました。

「アイナ。あなたに会えてよかったわ。フェリシアのこと、許してあげてちょだいね」

「もちろんよ、アニーおばさん。だって私たち、友達なもの」

「さあ、ぐずぐずしているとトンネルが消えちゃうわよ。行きましょ」

アイナ、ルーシー、リックスの3人は、トンネルに急ぎました。

フェリシアは、その様子を窓からこっそり覗いていました。本当にこのまま別れてしまっているのかと複雑な気持ちでした。

「フェリシア、あなたは間違っているわ。」

キラキラと不思議な光が輝くと同時に、そこに妖精の女王が現れました。

「女王様……」

「ねえ、フェリシア。さっきアイナが何を言おうとしていたかあなたにわかる？」

「……」

「あの子は本当はここに残りたかったんじゃないかしら。」

「え？……そんなことはないわよ。だってアイナは自分の家が一番落ち着くって言ってたもの」

「ええ、そうね。でもね、あの子は迷っていたのよ。家に帰れば独りぼっち。ここでみんなと仲良く暮らせばどんなに素敵だろう。でもおばあさんのお墓をほったらかしにはできない。だからフェリシア、あなたにここに残ってほしいって言ってほしかったのよ。そう

すればあの子はここに残ることを決心したと思うわ。あなただつてここに残ってほしかったんでしょ？でもそれを素直に言えなかった。だからこうして部屋に閉じこもるしかなかったのよね。今ならまだ間に合うわ。さあ、早く行きなさい。そして自分の本当の気持ちを伝えるのよ」

そう言つと女王は姿を消しました。

フェリシアはトンネルへと急ぎました。その顔に、もう迷いはありませんでした。

「ああ、私はなんてバカなのかしら。何でアイナの気持ちをわかつてあげられなかったのかしら。何で素直に自分の気持ちを伝えられなかったのかしら・・・」

その頃アイナたちは、トンネルの前で最後のお別れをしていました。そこには、さつきまでフェリシアの部屋にいたはずの妖精の女王もいました。

「ああ、とうとうみんなともお別れなのね。みんな本当にありがとう。みんなに会えてよかったわ」

「あなたのことは忘れないわ」

ルーシーが言いました。その目にはうっすらと涙が光っています。

「元気でな」

リックスが言いました。

「みんなさようなら」

そう言ってアイナがトンネルに入って行きました。その時です。後ろから叫び声がします。それはフェリシアでした。

「待ってアイナ！ いかないで。ずっとここにいてちょうだい。お願いよー！」

トンネルはどんどん薄くなっています。フェリシアがもうだめかと思ったその時でした。そこにアイナの姿がうつすらと見えたのです。それに気づいたフェリシアは、必死にアイナの手を引っ張りました。それと同時に虹のトンネルは完全に消えてしまいました。次に虹のトンネルが姿を見せるのは100年後。もう二度とアイナはおばあさんとの思い出が詰まったあの家には戻れないのです。

「よかったの？ 本当にこれでよかったの？」

フェリシアは何回も確かめるように言いました。

アイナは、そばにいた女王の顔を見つめました。

「何も気にすることはないのですよ。あなたがそう決めたのなら私は何も言いません。村の人たちもきつとやさしく受け入れてくれるでしょっ」

そう言って女王はやさしく微笑みました。

「アイナ！ 信じられないわ。まだ夢のようよ。本当にこれから毎

日いっしょにいられるのね」

フェリシアは泣きながら言いました。

「ええ、そうよ。もつどこにも行かないわ。もしかしたらシャボン玉をつかまえることができたおかげかもしれないわ。これからもよろしくね」

「本当によかったわ」

ルーシーも嬉しそうに言いました。

「まあ、よかったよ」

リックスは照れくさそうに言いました。

こうしてみんなは、笑顔で村へと帰っていきました。その姿をやさしく見つめていた女王のもとに、遠くから見えていたグリムがやって来ました。

「私がフェリシアに言ったことはよけいなことだと思いますか？グリムおばあさん」

女王は静かに言いました。

「それでよかったんじゃないかね。あんたが何も言わなくても最後はああなると思うよ。それがあの子たちの運命なのさ。死んだアイナのおばあさんも、あの子が独りで暮すよりもこのほうが安心するだろうしね。でもこれからが大変だよ。あの子はしょっちゅう問題を起こすだろうからね」

「そのわりにはずい分と嬉しそうね」

「年寄りの楽しみが1つ増えたっていうことさ」

そう言ってグリムが笑いました。

アイナが戻って来たのを見て、アニーやビリーが喜んだのは言うまでもありません。アイナはフェリシアの家に泊めてもらい、仲良く2人で眠りました。

2人が気持ちよく眠っているそのころ、何やら大人達が集まって話をしていました。

「さあ、明日はいそがしくなるぞ」

そう言って長老は楽しそうに笑いました。

### 第3話 とんがり帽子は友情のしるし 前編

その日は朝から大忙しでした。アイナが独り暮らしをしようと  
出したからです。

「子供のあんたに独り暮らしなんて出来るわけないじゃない。そん  
なに私たちといっしょに暮らすのがいやなわけ？」

フェリシアが言いました。

「遠慮しているのなら気にしなくてもいいのよ。私たちは迷惑だ  
なんて思っていないんだから」

アニーも言いました。

「そうじゃないの。1人で何でも挑戦してみたいのよ。どうせ向  
うでは1人で暮らすはずだったんだもの。何も心配することはない  
わ。いつもおばあちゃんのお手伝いをしていたから1人でもだいじ  
ょうぶよ」

アイナがどうしてもというので、食事はフェリシアの家で食べる  
ということと、時々ルーシーたちが様子を見に行くということで独  
り暮らしを認めることになりました。そのため、アニーたちはもう  
何10年も空き家だった家を住めるように掃除をしていたのです。

半日かかってようやく人が住めるようなきれいな家になりました。

アイナは自分の荷物を何も持っていなかったので、必要なものは村の人たちがそろえてくれました。洋服はフェリシアの服を貸してもらいました。掃除が終わるとアニーとビリーは、他に用事があるからと言って帰っていききました。

「さあ、アイナ。私たちはこれから長老さんの家に行くのよ。あなたがこの村の住人になったことをちゃんと報告するの」

フェリシアがそう言いました。

こうしてアイナたちはフェリシアたちといっしょに、長老の家に向かいました。その途中でアイナは、何かをしている村の人たちを見つけました。そこでは、村の広場で村人たちがたくさんの机を並べたり、飾り付けをしたりといそがしそうにしています。

「ねえ、あの人たちは何をしているの？」

「アイナには関係ないことよ。それよりも早く長老さんの家にいそぎましょ」

「フェリシアったらケチねえ、教えてくれてもいいじゃない」

「つまらないことは気にしないの。それよりほら、あそこが長老さんの家よ」

そう言ってフェリシアが指差しました。

長老の家は、少し小高い丘の上にありました。その家はほかの家

よりも大きくてりっぱでした。その家は長老に選ばれた人が住む家で、今の長老は20代目の長老でした。

「ねえ、アイナ。この前も話したと思うけど、長老さんはとても元気なおじいさんで自分のことをまだ若いと思っているの。だからおじいさん扱いしてはだめよ。いいわね」

ルーシーが言いました。

「ええ、わかったわ。長老さんってとてもやさしそうなおじいさんよね。元気なおじいさんって私は好きよ」

「あんまり元気すぎるのも迷惑だけどね」

リックスがつぶやきました。

「こんにちは」

フェリシアがノックをすると、部屋の中から元気な声がかえってきました。

「誰か知らんが用があるならかってに入ってきて来ておくれ。カギはかかっておらんよ」

フェリシアたちは部屋の中に入りました。部屋の中はとても豪華で、壁には歴代の長老のりっぱな肖像画が飾ってありました。

「おや、お前さんたちかい。よく来たね。さあ、そこにお座り。」

「長老さん、ちょっと・・・」

フェリシアが長老を呼んで隣の書齋でなにやら話しています。

「約束どおりアイナを連れて来たわよ。あとはお願いね。アイナが広場に行かないようにルーシーと2人でちゃんと見張っていてちょうだい」

「ああ、任せておくれ。これがわしの役目じゃからな。フェリシアたちも準備のほうは頼んだよ」

長老は白いヒゲをさわりながらうれしそうに言いました。

「ねえ、ルーシー、フェリシアは何をこそこそ話してるの？何だか私だけが仲間はずれみたいで変な気持ちだわ」

「あとで全部わかるわ。でも今はまだ言えないのよ」

アイナをなくさめるようにルーシーが言いました。

「じゃあ、私とリックスは帰るわ。いろいろ手伝いをしないとけないの。アイナとルーシーはここにいなさいよ。あとで迎えに行くからそれまでここを動いてはだめよ。いいわね」

そう言ってフェリシアとリックスは帰っていきました。

### 第3話 とんがり帽子は友情のしるし 後編

「さて、フェリシアたちが迎えにくるまでまだたっぷりと時間があるんじゃない。3人で仲良く遊ぼうじゃないかね」

長老が言いました。

「そうね。じゃあ、天気もいいことだし外に出て遊びましょうよ」

アイナが言いました。

「外？それは止めた方がいいんじゃないかしら。だってほら、その・  
・雨が降るかもしれないし」

ルーシーが慌てて言いました。

「とつてもいい天気よ」

アイナが外を見ながら言いました。

「確かに今はいい天気だけど、突然雨が降ることだってあるじゃない。それに長老さんは年寄りだから家の中のほうがいいと思うのよ」

「変ね。さっきルーシーは長老さんはとても元気なおじいさんだって言ってたじゃない」

「そ、そうなんだけど・・えーと・・いつもは元気なおじいさんなんだけど今日は腰が痛いよ。ね？長老さん」

「そ、そうなんじゃよ。今日は朝から腰が痛いんじゃよ」

ルーシーは長老の演技がへたなのでアイナに気づかれてしまうのではないかと心配していましたが、アイナはまったく気づいていない様子でした。

結局3人は、部屋のなかでゲームをして遊ぶことにしました。それは、トランプにそっくりなゲームでした。

最初はみんなで仲良く遊んでいたのですが、負けず嫌いの長老とルーシーは、どんどん夢中になり、気づいたらルーシーと長老の2人だけでゲームをしていました。つまらなくなったアイナは、フェリシアのところに出かけて行きました。しかし2人ともゲームに夢中になっていてまったく気づいていません。

アイナがたいくつそうに歩いていると、にぎやかそうにしている広場で、フェリシアを見つけました。後ろから声をかけるとフェリシアは、まるで幽霊でも見たかのように驚いて言いました。

「ア、アイナ！何であなたがここにいるの？ちゃんと長老さんの家にいないとだめじゃない。後で迎えに行くと言ったでしょ？」

「だって2人ともゲームに夢中になってつまらないんだもの」

「何ですって？もう！2人とも大事なことを忘れてゲームに夢中になるなんて信じられないわ！とにかく今すぐに長老さんの家に戻りなさいよ。ほら、早く」

「ここにいてはだめなの？だってこっちのほうが楽しそうなんだもの」

「いいからまっすぐに帰るの！」

フェリシアは無理やりアイナを追い返しました。

アイナはしかたなくとぼとぼと悲しそうに広場を離れました。しかし、長老の家には帰りませんでした。

アイナが向かった先は、グリムの家でした。グリムはアイナを温かく迎えてくれました。

「みんなが私のことを仲間はずれにするのよ。もうみんな私のことをきらいになっただのかしら・・・」

「誰もあんたのことをきらいになったりはしていないと思うよ」

「だってフェリシアったらすごく冷たいのよ」

「それは何か理由があるんじゃないのかい？確かにあの子はつきりと物を言う性格だけど、本当は正義感の強い優しい子なんだよ。付き合いは短いかもしれないけど、あんただってそれくらいのことにはわかっていいると思っただけだね」

「私だってそう思うわよ。でも・・・」

「もうすぐ仲間はずれの理由がはっきりすると思うよ。大事なことはあの子たちを信じるということさ。もうしばらくここでゆっくりしていくといいよ。そのうちルーシーが大慌てであんたを迎えにくるだろうからね」

グリムの言う通り、ルーシーが大慌てで飛んできました。

「やっと見つけたわ！勝手に外に出てはだめじゃない。おかげでたっぷりフェリシアに怒られたわよ。でも、それはゲームに夢中になつてた私たちも悪かつただけだね。それよりいそいでちょうだい。みんなが待つてるの」

「みんなって？」

「村の人たちみんなよ！アイナが知りたがっていたことがやっとわかるのよ」

「でも・・・」

「どうしたんだい？あんたらしくくないじゃないか。さあ、行っておいで。きっと忘れられない日になるよ」

「ありがとう、おばあちゃん。私、行ってくるわ」

アイナは笑顔でそう言うとルーシーといっしょに出て行きました。

辺りはすっかり暗くなっていました。村の広場はとても明るく、たくさんの村人たちがいました。

アイナが広場に行くとみんなが拍手で迎えてくれました。アイナは突然のことで訳がわかりませんでした。

「どう？驚いた？これはあなたの歓迎パーティーよ。あなたがこの

村の住人になったことをみんなに報告するの。そしてこの村でみんなと仲良く暮らしていけますようにって祈るのよ。フェリシアたちは村の人たちといっしょにパーティーの準備をしていたのよ。秘密にしていたのは悪かったわ。でもあなたを喜ばせたかったのよ」

アイナはルーシーの話を聞いてとても驚きました。まさかフェリシアたちが自分のためにこんなにがんばっていたなんて夢にも思わなかったからです。

「アイナ、さつきはごめんなさい。パーティーの準備がいそがしくて少しイライラしてたの。でもあなたを喜ばせるためにがんばったのよ」

「フェリシア・・・謝るのは私のほうだわ。あなたにきらわれたんじゃないかって疑ってしまったの。ごめんなさい」

「あら、そんなことはいいのよ。気にしないで。それよりもあなたにプレゼントがあるのよ。昨日の夜、私とお母さんとルーシーの3人で作ったのよ」

「おれだって手伝ったじゃないか！」

隣でリックスが抗議しました。

「ああ、そうだったわね。ほんのちよっぴり手伝ってくれたわね。さあ、アイナ。受け取ってちょうだい。私たちからの友情のしるしよ」

「みんなありがとう。とてもうれしいわ」

そう言ってアイナはフェリシアから何かが入ったきれいな袋を受け取りました。その中には、きれいなワンピースととんがり帽子が入っていました。

「ありがとうございます。本当にありがとうございます」

アイナは帽子とワンピースを抱きしめながら、嬉しそうに言いました。

アイナは、フェリシアの家でそのワンピースに着替えると、少し恥ずかしそうにしてみんなの前に戻ってきました。

「どつ？似合つかしら」

「とても似合っわよ」

フェリシアとルーシーが声をそろえて言いました。

「ありがとうございます。これでようやく私もこの村の住人になれた気がするわ」

アイナは嬉しそうに言いました。

「喜んでくれて私も嬉しいわ。私たち、これからも仲良くやっていけそうね。そりゃあ、時にはケンカをすることもあると思うけど、私たち、ずっと友達でいましょうね。もちろん、ルーシーやリックスもいっしょにね」

フェリシアの言葉にアイナは「もちろんよ」と力強く答えました。

村人たちも嬉しそうにそれを見ていました。

「さあ、ではそろそろパーティを始めよう。まずはわしの挨拶からじゃ。みんなももう知っているとは思いますが、新しくこの村で暮らすことになったアイナ・クラークじゃ。さあ、アイナ。こんどはお前さんが挨拶をする番じゃよ」

突然長老に言われたアイナは少し戸惑いましたが、心を落ち着かせてみんなの前に出て挨拶をしました。

「私はアイナ・クラークです。今日は私のために素敵なパーティがありがとうございます。こんなに良い人たちに出会えて私は幸せです。これからもよろしくお願いします」

アイナの挨拶が終わると村人たちがいっせいに拍手をしました。

「さあ、音楽じゃ」

長老のかけ声と同時に、楽しい音楽が聞こえてきました。

「ねえ、アイナ。いっしょに踊りましょう」

アイナは、フェリシアに誘われて陽気に踊りました。

「ねえ、リックスも踊ってきたら？」

「やめとくよ。踊りよりも食べることのほうが大事だもんね」

「私は踊ってくるわ」

そう言ってルーシーも踊りの輪に入りました。

ずい分おそい時間になりましたが、アイナや村人たちの楽しい時間はまだまだ終わる様子はありません。楽しい音楽と村人たちの笑い声がいつまでも続いていました。

#### 第4話 文字の勉強をしよう 前編

昨日の楽しい歓迎パーティーから一夜明けた次の日の朝、アイナはフェリシアの家で朝ごはんを食べていました。しかしそこにピリの姿はありません。昨日、夜遅くまで村人たちとお酒を飲んでいたので、まだぐっすりと眠っているのです。

「ほら、見てみなさいよアイナ。昨日のパーティーのことが書かれているわよ」

フェリシアはそう言ってアイナに新聞を見せました。そこには、昨日のことが絵入りで紹介されていました。なぜ絵なのかというと、この世界には写真という技術がないからです。そしてこの村の新聞は、毎日のように配達されるものではありません。この村がとても小さいため、毎日のように事件が起こるわけではないからです。しかもこの村はとても平和で、殺人事件のようなものは一度もありませんでした。

「どうしたの？うれしくないの？」

「そんなことはないわよ。絵を見ればなんとなくわかるもの。でも・・・読めないのよ」

「ああ、そうだったわね。ごめんなさい。アイナは人間の子供だったのよね。すっかり忘れてたわ。ねえ、アイナ。あなたはこれからずっとこの世界で暮らしていくんだからこの世界の文字をちゃんと

覚える必要があると思うの。私が教えてあげるからいつしよに勉強  
しましょよ」

「お姉ちゃんが教えるの？止めといたほうがいいんじゃないの？お  
姉ちゃんはずぐ怒るからなあ。お母さんが教えたほうがいいと思う  
よ」

リックスが言いました。

「お母さんはいろいろといそがしいの。そつよね？お母さん」

「え、ええ、それはそうだけど・・・本当にフェリシアでだいじょ  
うぶかしら・・・」

「もう！お母さんまでそんなこと言うの？もっと私のことを信頼し  
てほしいわね。私だってちゃんと教えられるわよ。いいわね、アイ  
ナ。朝ごはんが済んだらさつそく私の部屋で勉強よ」

「べつに明日からでもいいんじゃないの？それに私にこんな難しそ  
うな文字が読めるようになるとは思えないわ」

アイナはあまり勉強が得意ではありませんでした。

「ごういうことは早いほうがいいの！それにアイナが思うほど難し  
くはないのよ。あのバカなリックスだってちゃんと読めるんですか  
らね。アイナにだってちゃんと読めるようになるわよ」

「バカで悪かったな」

リックスがつぶやきました。

朝ごはんを食べて少し休憩すると、さっそく2人は勉強を始めました。

最初は仲良く勉強していたようですが、30分もたたないうちにフェリシアの怒鳴り声が聞こえてきました。どうやらアーニーとリックスの心配が的中したようです。

「バカ！何回教えたらわかるのよ。これは魔人のフェリシアじゃなくて美人のフェリシアって読むの！なんで1番大切なところだけ間違えるのよ。わざとやってるの？」

「私だって真面目にやってるわよ。そんな言い方しなくてもいいじゃない」

「よく言うわよ。考え事をしたり、よそ見したりしてるくせに！あなたのためにわざわざこうして教えてあげてるんじゃない。わかってるの？」

「何よ！私だって無理に教えてくれなんて言っていないわ。どうせならもっと優しい人に教えてもらったほうが良いわよ」

「あつそう！じゃあ好きにきなさいよ。私だってあんたみたいなものの覚えの悪い子に教えるのはごめんだわ」

「私も誰かさんみたいな怒りんぼに教えてもらうのはごめんだわ」

そう言ってアイナは出て行きました。

「やっぱりこつなると思ったわ」

アイナが出て行った後、アニーが言いました。

「心配することはないよ。子供のケンカなんてよくあることさ」

ようやく起きてきて遅い朝ごはんを食べているビリーが言いました。

フェリシアの家を出て行ったあとアイナは、今度はもっと優しい人に教えてもらおうと思いましたが、まだこの村の人たちとはあまり仲良しではないため、アイナが頼れるのは1人しかいませんでした。

そこはグリムの家でした。

「ああ、やっぱりここは落ち着くわね。何だか自分の家に帰ってきた気持ちよ」

部屋に入ったと同時にアイナが言いました。

「相変わらずよくしゃべるわね」

「あら、ルーシーもいたの？」

「私がいたら悪い？ジヤマなら帰るけど」

「まさか！ルーシーがジヤマだなんてそんなことちっとも思っていないわよ。本当よ」

「まあ、いいわ。で、今日は何しに来たの？どうせまた面倒なことをおばあちゃんにお願いしに来たんでしょ」

「面倒だなんてそんな・・・私はただこの世界の文字を教えてもらおうと思ってきたのよ。だってこの世界で暮らしていくには必要なことでしょ？」

「確かに必要だわ。でも、何でわざわざここに来たの？フェリシアに教えてもらえばいいじゃない」

「たしかにルーシーの言う通りだけど・・・フェリシアはだめなのよ。なんて言うか、その・・・えーと・・・」

「何よ！はつきりしないわね。何が言いたいの？」

「どうぞやらあなたたちはケンカをしたらしいね。」

さつきまで静かに2人の会話を聞いていたグリムが言いました。

「ああ、そういうことね。どうせアイナが怒らせるよつなことをしたんでしょ」

「そんなことはないわよ。そりゃあ、ちょっとはよそ見とかしたかもしれないけど・・・フェリシアったらすぐに怒るのよ。いやになっちゃうわ」

「たしかにあの子は怒りっぱいところがあるからね。それに比べてあなたはマイペースだからさ。ケンカになるのもなんとなく分かる気がするよ。それでもあなたのための事を思って一生懸命教えようとしたはずだよ。あなたもそれくらいはわかってやらないといけないね。ちゃんと仲直りしてフェリシアに教えてもらったほうがいいと思うよ」

「おばあちゃんは教えてくれないの？」

アイナががっかりした顔で言いました。

「一生仲直りしないというなら私が教えてあげるよ。でも、仲直りする気があるなら早いほうがいいよ。そうしないとよけいに気まずくなるからね」

「でも・・・どうやって仲直りしたらいいか分からないわ」

「そんなことは簡単だよ。直接言いくいのなら手紙を書けばいいのわ」

「おばあちゃんったら変なことを言うのね。私は文字を読むことも書くこともできないのよ。だからこうして教えてもらいに来たんじやない」

「そんなことは私だってわかってるよ。ちゃんと最後まで話をお聞き。あなたが手紙を書くのを私が手伝ってあげると言ってるのさ。それならあなたにだって出来るだろう？それともやっぱり直接仲直りするほうがいいかい？」

「そうね。がんばって手紙を書くほうがいいと思うわ」

「そのほうが私もいいと思うね。じゃあ、始めようか。まずはフエリシアに伝えたいことを口で言うてごらん。それを私が文章にするからね」

アイナは少し考えてからしゃべり始めました。

#### 第4話 文字の勉強をしよう 後編

「美人で優しいフェリシアへ。あなたが私のために一生懸命教えてくれているのに真面目に勉強しないでごめんなさい。今度からは真面目に勉強するのでもう一度教えてください。アイナより」

「何よそれ・・・ちょっとわざとらしいにもほどがあるわよ。体中がかゆくなっちゃっわ」

ルーシーが体をさわりながら言いました。

「あら、そうかしら？私はとってもいいと思うけど・・・」

「まあ、うぬぼれの強いあの子にはちょうどいいかもしれないね。さあ、私が書いた文章を今度はあんたが書き写してごらん。やっぱり手紙は自分の字で書かないと意味はないからね」

「ええ、そうね。心を込めて書くわ」

アイナはグリムの書いた文章を見ながら、真剣に書き写しました。そして、何回も失敗を繰り返しながら何とか完成させました。

「さあ、出来たわ。今度こそどうかしら」

「ああ、よく書けてるよ。どうやらだいじょうぶのようだね。さあ、早くフェリシアに渡しておいで」

「ありがとう、おばあちゃん。」

アイナはそう言って出て行きました。

「それにしても・・・あのもの覚えの悪さは普通じゃないわね。ただ書き写すだけなのに何回も失敗するんですもの。あれじゃあ、フェリシアがイライラするのも無理はないわね。私だってイライラしちゃうわよ。あの調子だと仲直りしてもすぐにまたケンカになるんじゃないかしら」

「相変わらず心配性だね、ルーシーは。私たちにしてあげられることはここまでだよ。あとはあの2人の問題なのさ」

そう言ってグリムはアイナが失敗した紙を整理しました。そしてあることに気づいてとても驚きました。それは、フェリシアに持っていったはずの手紙がここにあったからです。

「ルーシー、あの子は手紙を持っていかなかったのかい？」

「いいえ、ちゃんと持っていったはずよ。どうかしたの？」

「フェリシアに持っていったはずの手紙がここにあるのさ。どうやらあの子は失敗したほうの手紙を持っていったようだね。あんなに一生懸命がんばってようやく上手くできたというのに・・・やれやれ、あの子にも困ったものだよ」

「あの子らしいわね。私が届けてあげるわ」

「やめときな。言っただろ？ここから先はあの子たちの問題なのさ。それにさすがのあんたでも間に合わないよ。上手くいくことを祈るしかないね」

「ほんとにもう！心配ばかりかけるんだから・・・」

その頃アイナは、手に持っている手紙が失敗したものは気づきもせず、ドキドキしながらフェリシアの家に向かって歩いていました。

家の前に来ると、手紙をポストに入れて逃げるように走って家に帰りました。家の中でその光景をみていたアニーが、不思議そうな顔でポストの中の手紙を取り出して家の中に入ると、それをフェリシアに渡しました。

「この手紙・・・本当にアイナが書いたのかしら。だってあの子、自分の名前しか書けなかったのに・・・」

フェリシアは不思議に思いながらも手紙を読みました。手紙にはこう書かれていました。

『魔人で野菜のフェリシアへ。あなたが一生懸命襲ってくれたのに真面目に勉強しなくてごめんなさい。こんどは真面目に勉強するのでもた襲ってください。アイナより』

「何よこれ・・・間違いだらけじゃない。やっぱり私がちゃんと教えてあげないといけないようね」

「それはいいことだと思うよ。でも・・・その怒りっぽい性格を直さないとまたケンカになるんじゃないかな」

「できることならそうしてもらいたいね。でも性格なんて簡単には直らないと思うよ。お姉ちゃんの場合は病気みたいなものだからさ」

「お父さんやリックスに言われなくたってそんなことくらいわかってるわよ。私だって反省してるんですからね。同じ失敗は繰り返さないつもりよ。じゃあ、ちょっとアイナの家に行ってくるわ」

アイナの家の前まで来るとフェリシアは、大きく深呼吸をしてドアをノックしました。

しばらくして、アイナが少し恥ずかしそうにして出てきました。

「フェリシア・・・さっきはごめんなさい。手紙は読んでくれた？」

「ええ、読んだわよ。間違いだらけだったわ。もう一度私と勉強しましょう。私って思ったことを何でもしゃべっちゃうのよね。それでいつもああ、言わなければよかったって後悔しちゃうの。でもこれからはなるべく怒らないようないい先生になるつもりよ。またいっしょにがんばりましょう」

「ありがとう。私もがんばるわ。そして怒られないようないい生徒になるわ」

「そう言ってくれて私も嬉しいわ。でもね、怒らないからといって  
甘やかすわけではないのよ。厳しくするから覚悟しなさいよ」

「望むところだわ」

そう言ってアイナは笑いました。

## 第5話 恐怖のクッキング 前編

「みんなお早う！今日もとってもいい天気ね」

めずらしく早起きをしたアイナは、森の中を歩いていました。朝の森はとても心地良いものでした。鳥たちが歌を歌い、風がお早うと言ってアイナの頬を撫でます。アイナは森の動物や妖精たちに元気に挨拶をしながら歩いていました。しかし、今日は朝の散歩に来たわけではありません。ようやく本来の目的を思い出したように何かを探し始めました。

「えーと・・・どれが食べられるのかしら。このきれいなキノコ、とてもおいしそうね。いいわ。これとこれと・・・この赤いキノコもおいしいかもしれないわね」

アイナは森の中で食べられそうな野菜を探しているのです。しかし、アイナにはどれが食べられるのかわかりません。あまりものを深く考えないアイナは、なんとなくおいしそうなきのこを適当に採って家に戻りました。

家に戻ったアイナは、さっそく料理に取り掛かりました。しかし、どう料理すればいいのかわからなかったので、採ってきたキノコを適当な大きさに切ると、それをナベに入れてキノコスープを作ることにしました。

「さあ、もうすぐ完成よ。思ったよりも簡単だったわ」

ちょうどそこへフェリシアとリックスの2人がやって来ました。部屋へ入ると同時に、フェリシアが鼻をつまんで言いました。

「何よ、このものすごい臭いは・・・一瞬、間違えてグリムおばあさんの家に来たのかと思ったわよ。あんた何してるの？朝ごはんの時間に遅れないでっていつも言ってるでしょ。早く行きましょ。お母さんたちが待ってるわ」

「あら、そんなにすごい臭いかしら・・・薬の臭いに慣れてるからよくわからないわ。朝ごはんの時間に遅れたのはごめんなさい。今おいしいキノコのスープを作ってるのよ。だってほら、いつも作ってもらってばかりでは申し訳ないでしょ？だから私も何か作って持つていこうと思ったのよ。もうすぐできるはずだからちょっと待っててちょうだい」

「こづいづいのをありがた迷惑っていうんだよね」

リックスがつぶやきました。

フェリシアは恐る恐るナベの中をのぞきました。

「もしかしてキノコスープってこれのこと？」

「ええ、そうよ。おいしそうでしょ？」

「冗談じゃないわよ！あんた私たちを殺す気？これ全部毒キノコよ」

「あら、そうだったの？とてもきれいなキノコだったからおいしい

のかと思ったのよ。残念だわ」

「アイナはよけいなことはしなくてもいいのよ。お母さんは料理を作るのが好きだから気にしなくても大丈夫よ。さあ、行きましょ」

そう言ってフェリシアは外に出ようとしたのですが、部屋の周りを見渡して驚きました。

「この変な臭いに気をとられて気づかなかったけど・・・何よこの部屋・・・服は脱ぎっぱなし、文字を練習した紙は床に散らかり放題。ちよつと！テールに泥だらけの靴下なんか置かないでよ。汚いわね。あんたよくこれで独り暮らしするなんて言えたわね」

「おれがアイナの立場でも独り暮らしをしたいと思うね。怒りんぼの誰かさんといっしょに暮らすくらいなら、独りでのんびり暮らしたほうがいいからね」

フェリシアはジロリとリックスをにらむと、また話を続けました。

「いい？あんまりひどいと私たちといっしょに暮らしてもらつわよ。それがいやならちゃんとしてちよつだい」

「もちろんわかってるわ。朝ごはんを食べたらちゃんときれいにするわ。心配しなくてもだいじょうぶよ。さあ、行きましょ。アニーおばさんが待ってるんでしょ？」

ようやくアイナたちはフェリシアの家に向かいました。

「ねえ、アニーおばさん。私にも作れる簡単な料理を教えてください。私もおばさん。私にも作れる簡単な料理を教えてください。」

朝ごはんを食べた後アイナが言いました。

「ええ、いいわよ。じゃあ、今日のお昼ごはんをいっしょに作りましょう。」

「ありがとうございます。アニーおばさん。」

「じゃあ、それまでは勉強よ。」

アイナとフェリシアはさっそく勉強を始めました。リックスはまた今日もケンカになるのではないかと少しワクワクしていましたが、まったくその気配はありません。どうやら仲良く勉強しているようです。

勉強が終わると、アイナは台所に行ってアニーの料理を手伝いました。アニーはわかりやすく丁寧に料理を教えました。

「どう？私が作った干し肉とキノコのスープよ。おいしいでしょ？」

「まるでアイナが自分だけで作ったみたいない方をするのね。アイナはほんのちょっと手伝っただけじゃない。」

フェリシアが言いました。

「あら、じゃあいいわ。今度は私だけで作るから。ねえ、アニーおばさん、今日の夜ごはんは私だけに作らせてちょうだい。」

「ええ、いいわよ」

「何だよ。また夜も同じものを食べるのか・・・もしアイナの料理が食べられなかったらどうするの？アイナの家で見たキノコスープは強烈だったからなあ」

リックスが不満そうに言いました。

「せっかくアイナがやる気になってるのよ。少しくらい我慢してちょうだい」

アニーが言いました。

「ちえっ！しょうがないなあ」

お昼ごはんを食べた後、フェリシアとリックスは外に遊びに行きました。アニーとビリーは、のんびりと青い色をしたコーヒーに似た味の飲み物を飲みながらソファで昼寝をしています。

「ちよつと早いけど、そろそろ始めたほうがよさそうね。さあ、がんばるわよ！」

アイナは、はりきって料理を始めました。アニーに教えてもらったことを思い出しながら、一生懸命がんばっています。

「さあ、あとはこのまま煮込めば完成だわ」

アニーが作れば30分もかからない簡単な料理でしたが、アイナは野菜を切るだけで1時間もかかりました。あんなに早くに料理を開始したのに、もうそろそろ夕方になるつかという時間でした。

「ねえお姉ちゃん、アイナの料理だいじょうぶかな」

「だいじょうぶなわけないわよ。覚悟したほうがいいわね」

フェリシアとリックスがそんな話をしながら家に帰ってきました。ドアを開けて部屋に入ると同時に、焦げ臭い臭いが漂ってきました。フェリシアが急いで台所に向かうと、ナベから黒い煙がモクモクと出ています。

「ちょっとアイナ！何やってるのよ！」

フェリシアは慌ててバケツの水をかけて火を消しました。

「あら、フェリシア。どうかしたの？」

「どうかしたのじゃないでしょう！もう少しで火事になるところだったのよ！」

「ああ、そうだったわ！すっかり忘れてた！」

アイナは朝早くに起きたので、スープが出来るのを待っている間に居眠りをしてしまったのでした。



## 第5話 恐怖のクッキング 後編

「一体どうしたの？」

アニーが心配そうにやって来ました。アニーも今まで昼寝をしていましたが、フェリシアの大声でようやく目を覚ましたのでした。

「もう！お母さんも少しはアイナのことを見ていてくれないとダメじゃない。もう少しで大変なことになるところだったのよ」

フェリシアが焦げたナベを指差しながら言いました。

「あらまあ、これは大変ね。だいじょうぶ？ケガはなかった？」

「ええ、私はだいじょうぶよ。アニーおばさん・・・でも、せっかく作ったスープが・・・」

「そんなに落ち込まないで。誰にでも失敗はあるわよ。またチャレンジすればいいじゃない」

結局その日の夜ごはんはアニーが作りました。フェリシアとリックスの2人は、アニーの作ったおいしい料理を食べながら、アイナが失敗してくれてよかったと心の中で考えていました。それは、アイナの料理を食べなくて済むからです。

「アニーおばさん、少し材料を分けてもらえないかしら。家に帰ってもう一度作ってみたいの」

「ええ、もちろんいいわよ。必要なだけもっていくといいわ」

「ありがとうアニーおばさん。さようなら」

食事が終わると、アイナはたくさんの野菜などを持って自分の家に帰りました。

家に帰ると、さっそく練習を始めました。しかし、何回作ってもアニーのような味にはなりませんでした。

「同じ材料を使っているはずなのにどうしてかしら・・・不思議だね。やっぱり私には無理なのかしら・・・」

しかしアイナはあきらめませんでした。どうしてもフェリシアたちをあつと言わせたかったからです。その後も何回も失敗を繰り返しましたが、それでも一生懸命がんばりました。

「出来たわ！これならきつとおいしいって言ってくれると思うわ！」

気づいたらもうすっかり夜が明けていました。アイナは徹夜をしたにもかかわらず、今は興奮しているため、まったく眠たくありませんでした。

アイナは、まだ少し早い時間でしたが、早くみんなに食べて欲しくてしょうがないといった感じで、今作ったばかりのスープの入ったナベを抱えてフェリシアの家に出かけました。

「まあ、アイナじゃない。お早う。今日はずいぶん早いね」

アニーがそう言ってアイナを部屋に入れました。

「アニーおばさん、見て。これ、私が作ったのよ。今日の朝ごはんはこれをみんなに食べて欲しいんだけど、いいかしら」

「まあ、すごいじゃない。がんばったのね。もちろんいいわよ」

「ありがとう。アニーおばさん」

アイナは笑顔で準備を始めました。ちょうど朝ごはんの準備が出来た頃、ようやくフェリシアたちが起きてきました。

「あら、アイナじゃない。めずらしく今日は早いのね。どうしたのよ。ニコニコしちゃって・・・気持ち悪いわね」

フェリシアが不思議そうに言いました。

「とにかく座ってちょうだいよ。さあ、朝ごはんを食べましょ」

アイナにそう言われてフェリシアたちは、わけが分からないまま席に着きました。

「ねえ、そろそろ説明してくれてもいいんじゃない？アイナはさっきから何をそんなに嬉しそうにしてるの？何かいいことでもあったの？」

「今日のこの朝ごはん、私が独りで作ったのよ」

それを聞いてフェリシアとリックスは驚きました。

「さあ、みんな食べてちょうだい。昨日は失敗したけど今度は自身があるのよ」

フェリシアたちは覚悟を決めて恐る恐る一口食べてみました。

「おいしいわ。とても上手に出来ているわよ」

アニーが言いました。

「うん。おいしいと思うよ」

ビリーも言いました。

「まずくはないと思うよ」

リックスが言いました。

「確かにまずくはないわね。アイナにしては良く出来たと思うわ。でも、お母さんの味にはまだまだ敵わないけどね」

フェリシアが言いました。

「もうフェリシアったら・・・正直においしいって言えばいいのに。素直じゃないのねでも、アニーおばさんとビリーおばさんがおいし  
いって言うってくれてよかったわ。何だか安心したら眠たくなっちゃ  
ったわ。私は家に帰って寝ることにするわね。昨日の夜は寝てない  
のよ」

「アイナったら何を言ってるのよ。朝ごはんの後は勉強の時間でし

よ？」

「1日くらい休んでもいいんじゃないの？」

「そりゃあ、アイナが料理をがんばったことはよくわかるわよ。でもこういうことは毎日やったほうがいいの！わかった？」

「あーん！フェリシアの意地悪！」

「うそ泣きしたってだめよ！さあ、行くわよ」

そう言ってフェリシアはアイナの腕を無理やり掴んで2階に連れて行きました。

「あーあ、かわいそうに・・・」

リックスがつぶやきました。

アイナは、勉強が終わるとそのままフェリシアのベッドでぐっすりと眠ってしまいました。

「よっぽど疲れてたのね。今日のアイナはよくがんばったと思うわよ。料理もおいしかったわ」

フェリシアはそう言って微笑むと、静かに下の部屋に下りていきました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0908f/>

---

とんがり帽子の女の子

2010年10月11日20時42分発行